

書評

根 岸 隆

『非ワルラス的伝統の経済理論』

Takashi Negishi, *Economic Theories in a Non-Walrasian Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985, ix+205 pp.

本書は、表面上、古典的経済理論を個別的に回顧する形式をとっているが、視点が現代経済理論の諸問題におかれている点で、きわめて特徴のある内容となっている。従来の経済学説史が、過去の経済理論の内容、形成過程、成立背景などを史的に探求していく歴史的方法を主として採用していたのに対し、本書では、現代の主流的理論というべきワルラス経済学において把握が困難となっている諸問題の解決(またはその糸口)が、古典的経済理論のうちに見出されるのではないかとし、学説史的研究を理論的探求の有力な一方法として位置付けている。実際、本書を読んで得た感想は、本書が優れて理論的研究書であり、根岸隆という経済学者が過去から一貫して進めてきた研究活動の延長線上に本書の成果もある、ということであった。この意味で、方法論に関して本書の独自性は大いに評価されるべきであると思われる。

周知のように、根岸氏は過去に *General Equilibrium Theory and International Trade*, North-Holland, 1972 と *Microeconomic Foundations of Keynesian Economics*, North-Holland, 1979 を著して、前者では、ワルラス経済学の枠組みの内とはいえ、収穫逓増、外部性、独占的競争といった競争的均衡にとって障害となる要因を正面から取り扱い、後者では、マクロ経済学のミクロ的基礎付けを、数量調整が価格調整より優勢な非ワルラス経済学として構築しようと、野心的に試みたのであった。

本書は、収穫逓増と費用逓減、賃金と利潤、国際貿易、市場と貨幣の4つのセクションに分けられ、それに関連した題材が個別的に論じられており、一見して先の2書との関連性は明白である。(なお、本書のかなりの部分は、『古典派経済学と近代経済学』岩波書店, 1981 や『経済学の歴史』東洋経済新報社, 1983 において邦文で参照可能である。もちろん、本書のみ参照可能な箇所もあり、第4, 5, 6, 8章がそうである)。とくに興味深く拝読した箇所は、第1部「収穫逓増と費用逓減」と第4部「市場と貨幣」であったが、枚数の都合もあるので、この2つのセクションに限定して以下、紹介とコメントを行うことにしたい。

第2章は、アダムスミスの「分業は市場の大きさに制限される」という有名な命題にむけられており、純粹競争と収穫逓増が両立する可能性を、スミスの叙述から読取ろうとしている。この問題の解決は、競争的条件下であっても主体はワルラス的(価格受容)行動とは異なる行動をとると解釈するところであり、屈折需要曲線の考えを適用して、収穫逓増の下でも均衡が成立することを示し、かつ需要の変動が屈折点を変更させることで、スミスの命題を合理化している。

飛んで、第4章では、マルクスが扱われ、費用逓減の下でこそ利潤率低下傾向は説明可能であると主張する。資本家が利潤極大化行動をとる限り、たとえ最新の技術でも、それが利潤率を低下させるのであれば採用されない。このため、利潤率低下は論証困難な命題となるのであるが、根岸氏は費用逓減的技術と資本家の近視眼的行動を想定すれば、利潤率低下傾向は説明できると主張する。つまり、他の資本家が行動を変えない限り、資本家は費用逓減的技術を採用すれば、費用低下分だけ利潤率を高めることができる。しかし、最終的には他の資本家の追随を誘引し、全体として供給を増やして利潤率をこえて低下させる、というわけである。

第5章では、右下がりの個別的な需要曲線の方法とは別に、A. マーシャルのライフサイクル理論から費用逓減問題を解決しようとしている。2期間モデルが考えられ、両期間費用逓減現象はみられるものの、資本のライフサイクルの結果、老年期の方が壮年期より単位費用が全体に上昇するものと想定する。この場合、定常状態の下でも超過利潤ゼロで、利潤極大化をみたした競争的企業の均衡は成立するのである。

以上、収穫逓増(費用逓減)と競争的均衡の両立性の解決策として、屈折需要曲線の理論とライフサイクル理論が提示されているわけで、その考えはとても興味深い。しかし、これが唯一の解法というわけではなさそうである。例えば、自然価格を、各主体がすべて同一の分業段階にあったときの操業可能な最低費用と考えることが出来る。このとき、分業の低次段階と高次段階に応じて自然価格は分れる。もし、最低費用を実現する供給量がその費用水準に対応した需要量より大きければ、産業全体として高次分業段階での操業は不可能になり、その採用は見送られる。逆に需要が増えれば、高次の分業段階の採用が可能となる。この場合、各主体は短期的には、所与の費用逓増的技術(分業)の下で競争的に行動している。しかし、長期的には費用が逓減する時、主体は技術選択の際に、近視眼的に動かず、むしろ産業全体として落ち

着く長期的価格水準(自然価格)を予想し、それと総需要とのバランスから採用を決定する。この場合、屈折需要曲線は使われない。

第4章は、逆の発想をしている。ここでは近視眼的行動こそ利潤率低下をもたらす動因である。とすれば、マルクスは主体の行動に関シミスとは相反する考えをもっていたことになる。その是非については論証する能力はないのではあるが、技術進歩が費用逓減の効果をもたらす限り、本書で描かれた利潤率低下の論理は、動機づけからはともかく、実際に低下として現れるかについては必ずしも説得的ではない。利潤率低下は部分均衡論の立場から説明されているが、費用逓減による生産物=所得増加、それによる需要の拡大のルートが見落されているからである。

第4部の第12章は、S. ジェボンズの交換理論に関心がむけられ、ワルラス均衡配分と自発的交換の関係についてのべられている。根岸氏はジェボンズの「無差別の法則」に注目して、彼が可分的取引(当事者は同一の交換比率の下で一方的に取引規模を分割できる契約)を仮定していたことを主張する。この場合、各主体間でむすばれる交換比率が一樣でなければ、異なる比率の中間にあたる比率を提示することにより、より良い取引が可能となる。取引が可能であれば、主体の数が有限でも、このような取引が実現可能である。したがって、交換比率が一樣でなければ、取引はブロックされ、結局一樣な交換比率のパレート最適な取引が残し、それは競争的均衡となる。つまり、有限主体の経済でも、取引形態の視点から競争的均衡を特性化することが可能となる。

第13章では、メンガーの「販売力」(Absatzfähigkeit)が扱われ、その分析的枠組みは未発達な市場組織を前提にした非ワルラス(不均衡)理論の上で構築されなければならないことを述べ、続いて第14章では、マクロ経済学のミクロ的基礎付けとしてワルラス経済学(タトヌマン経済)は不適當であること、むしろ貨幣を当初から前提にしてきたマーシャル経済学(ノンタトヌマン経済)にこそ、ミクロ的基礎理論を見出すべきであるとして、その根拠を文献的に論証している。

根岸氏は、メンガーの貨幣理論の世界を未組織市場にもとめ、個別的取引者(とくに供給者)が不完全競争的行動をとるものとして議論を進めている。価格は高めに設定され、超過供給が生じることになるが、商品の販売力の程度はこの超過供給の大きさを象徴させているようである。そして翻って、未組織市場で高度の販売力をもつのは、超過供給がゼロのときで、それは供給の弾力性が

ゼロとなる(限界費用曲線が垂直になる)ときである。この性質をみたまふ財が、交換媒体として受容される。このように、メンガーの考えを非ワルラス(不均衡)理論の立場から説明しようとするわけであるが、その方法の妥当性にもかかわらず、この章に関しては少なからず理解し難い点があった。販売力(または流動性)といった概念が、当該財を介して如何に他の財の交換を容易にするかという、どちらかという则需要曲線の形状を左右するものであるのに、販売力の程度をむしろ供給の特性から説明しようとするのは、素直には納得し難く感じられた。

最後になるが、本書は「ワルラス的伝統」を、組織化された市場下の競争的行動に代表させている。そしてこのワルラス的伝統とは異なる行動を古典的経済理論からみだし、縦横にその豊潤な世界を再現しようとしている点で、きわめて興味深い書物となっている。ただ、このような「ワルラス的伝統」のとらえ方とは別に、ワルラスもマーシャルも共通して抱いた考えに、市場調整力への信頼性があったと思われる。ワルラスの市場とは異なる不完全市場が想定されたとしても、長期的には短期的障害を取除いて取引が競争的均衡へ接近していくのであれば、そこには思考法上の共通基盤が存在することになる。ワルラス的伝統をこのように解すれば、非ワルラス的伝統は自と市場調整力の不完全性にむいてくる。当然、このような視点から経済理論を再分類していく接近法が考えられるのであるが、この接近法が果たして意義があるのかどうか、できればお聞きしたい、というのが読後の最後の感想であった。

〔明石茂生〕